

名古屋都市圏の「見えない格差」とコミュニティ・ウェルビーイング ——南医療生協と地域コミュニティ：名古屋市南区の名南ブロックを事例にして——

名古屋大学 河村則行

1. 目的と背景

現在、われわれの研究グループは、名古屋都市圏をフィールドに共同研究を行っている（基盤研究B：名古屋都市圏の「見えない格差」：何が地域社会のウェルビーイングを規定するのか）。今後、ポスト工業化と人口減少のもとで、名古屋都市圏でも成長する地区と衰退する地区との格差が拡大することが予想されるなかで、地区（コミュニティ）の集合的効力感（凝集性とインフォーマル・コントロール）は媒介要因として、地域のウェルビーイング（健康、福祉）に効果をもたらし、まちの衰退を食い止めることができるのかを検証することを目指している。

本報告では、名古屋市南区の条件不利地区（住工混在地帯）を事例に、南医療生協が協同組合として地域社会で果たしている役割を考察する。協同組合は社会的排除などの問題に取り組むサードセクター、社会的企業として注目されている。南医療生協の発祥地である名南ブロックで進められている多世代共生のまちづくりをとりあげ、介護・福祉や災害などの地域の課題に対して、地域の組合員がどのような活動（生活支援、コミュニティ・サロン、見守りなどのインフォーマルな公共財の供給）に取り組んでいるのか、地域の他の住民組織、施設、自治体と連携しているのかを明らかにする。

2. 方法

名南ブロックは地域（組合員）の凝集性が高く、住民のさまざまな協力活動が見られる地域であり、集合的効力感が高く、社会関係資本（信頼）が蓄積されていると考えられ、ドキュメント分析、インタビュー調査にもとづいて、その地区の集合的効力感が高い要因（近隣などの社会的ネットワーク、歴史的記憶、コミュニティの開発時期）を分析する。

3. 南医療生協と地域コミュニティ

名古屋市南区は、干拓・埋め立てで造成された海拔ゼロメートル地帯にあり、農業社会であったが、1930年頃から大工場が立地しはじめて（三菱航空機などの軍需工場）、戦後は名古屋南部工業地帯として発展したが、1959年には伊勢湾台風でもっとも被害を受け、高度成長期には新幹線公害、大気汚染公害の被害地域であり、2000年頃からは人口減少が進み、名古屋市でもっとも高齢化が進んでいる。南医療生協は、1961年に伊勢湾台風後の医療救援をきっかけに設立された病院で、その後「名古屋南部公害」の拠点病院になり、現在は高齢者の地域包括ケアのモデル地区として有名で、「総合的な地域医療」「市民との協同」「みんなちがってみんないい ひとりひとりの命輝くまちづくり」の理念のもと、おたがいさま運動の健康まちづくりを展開している。このように南医療生協は、それぞれの時代の地域社会の問題、住民のニーズに対応して、発展してきた。現在も南医療生協が組合員を増加させているのも、地域の組合員を中心に一人一人の生活支援に力を入れ、医療、介護、地域の生活支援をつなげることに成功し、介護・福祉の住民の差し迫ったニーズに応えていることにあると考えられる。そして、南医療生協は地域の課題解決において自己完結的ではなく、地域の他の施設、町内会などの地域組織との連携を深めている。

文献

Sampson, Robert J, 2011, Great American City: Chicago and the Enduring Neighborhood Effect, Chicago: University of Chicago Press.